

# 江戸文人と清楽

中\*  
尾 友香梨

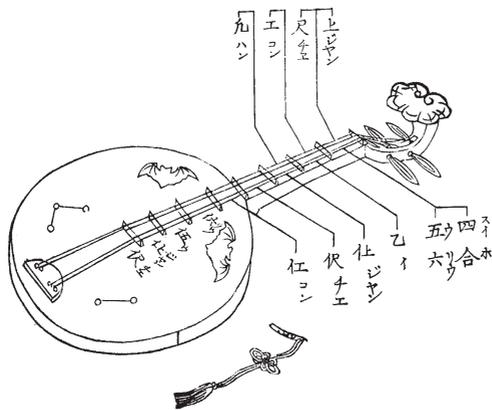
## はじめに

長崎には「明清楽」と称する異国情緒豊かな音楽が伝承されている。これは「明楽」と「清楽」の総称であるが、文字どおりそれぞれ明の音楽および清の音楽を指す。しかし今日長崎で伝承されている明清楽は、実質上そのほとんどが清楽である。

清楽は、主に化政期（一八〇四～一八二九）から天保年間（一八三〇～一八四三）にかけて来日した清客たちによって伝えられた音楽であり、そのもとになっているのは当時の中国江南で流行した都市俗曲である。したがって、内容は

甚だ通俗的であり、華音の歌に管・絃・打楽器による演奏を伴う。日本ではその代表的な楽器である月琴が頗る人気を博したので、また「月琴音楽」とも称する。月琴とは琵琶の変形である阮咸から派生した絃楽器の一つである。胴が満月のように丸く扁平な形をしており、音は琴に似ている。清楽に用いられる月琴は、短棹に八柱（フレット）、四絃（二絃ずつ同音）が張られ、演奏の際は撥で絃を弾いて音を出す（図一）。

月琴の清らかな音色とエキゾチックな旋律で特徴づけられる清楽は、江戸後期に長崎に流入した後、やがて長崎だけでなく、江戸・大坂・京都の三都を中心に全国規模で流行するようになる。その背景には江戸時代の折からのシノワズリーが大きく作用したと考えられるが、清朝の俗楽であるこの音楽を江戸時代の文人たちは如何に受けとめていたか、またそのことは清楽の流行形成に如何なる影響を与えたか、などといった問題は大変興味深いことである。しかし従来、江戸文人と清楽との関わりについて研究した専論は、全くないと言っても過言ではない。そこで本稿は、江戸文人と清楽の関わりに焦点を絞り、右記の問題について考えることにする。



図一 宇喜多小十郎編『明清楽歌譜』（京都、明治十年、九州大学演文庫蔵）より

## 一、大島秋琴の『近世名家詠阮詩録』

清客たちによって長崎に伝えられた清楽に、いち早く接する機会を得たのは、唐人屋敷に出入りしていた唐通事と丸山遊女であるが、彼らを介して直接的または間接的に清楽の伝授を受けた人々がいる。長崎遊学の文人騷客である。彼らは清客から中国の詩書画を学ぶと同時に、余技として清客の得意とする清楽をも教わったのである。後に彼らは長崎での修業を終えて、江戸や京坂へ進出、あるいは故郷に戻って活躍したが、その際に長崎で身につけた清楽もこれらの土地に伝えた。また彼らは各地の有力な文人・儒者と親密な交流を重ねていたので、彼らが長崎からもたらした清楽は、当時の最先端の中国文化の一つとして、これらの文人・儒者の耳にするとところとなり、少なからぬ反響を及ぼした。そしてやがては、文人・儒者の中からも清楽を嗜む者が現れた。このことが、後に形成された清楽の流行に大きな影響を及ぼしたことは言を俟たない。

比較的早い時期に文人・儒者の中で清楽を広めた人物としては、遠山荷塘、亀齡軒斗遠、大島秋琴、大島松洲などが代表的であるが、就中、遠山荷塘と亀齡軒斗遠はそれぞれ江戸と京坂を拠点として活躍しており、長崎の清楽を三都にもたらした鼻祖とも言うべき人物である。ただ兩人については、徳田武氏の「遠山荷塘と広瀬淡窓・亀井昭陽」(1)と中野三敏氏の「亀齡惑溺」(2)に、それぞれ関連する事柄が紹介されているため、ここでは重複を避ける。なお大島松洲に関しては、残っている記録が乏しく、詳しい事跡はまだほとんどわからないが、現段階で明らかになっ

たことだけを、第二節と第四節で触れることにし、本節では大島秋琴と彼の『観生居月琴詞譜』について紹介しよう。

大島秋琴、名は克、字は子復、通称は欽一郎、別号に玩古堂、また不如睡斎。詳しい生没年はわからないが、江戸後期から明治初期にかけて活躍した人物と見られる。江戸で生まれ四方を遊歴し、伊勢の津に長らく居住したが、最後は松坂に移りそこで没した。月琴と一絃琴を得意とし、煎茶の技に長じた。また篆刻や絵画を善くし、特に書画の鑑定に秀でた。

秋琴の著作に『観生居月琴詞譜』二巻二冊が現存する(3)。門人隅田圭峰(名は立)の校訂を経て、隅田陶陶(名は隣)によって万延元年(二八六〇)に伊勢の津で上梓されたこの書物は、江戸時代に刊行された数少ない清楽譜の一つであり、その価値は極めて高い。収録内容は次のとおりである。

上巻

○一越調部

操音

算命曲

含艶曲

九連環

鳳陽調

四節曲

久聞

夏門流水

脚魚売

補缸

○国唱歌譜(四季今様)

春譜

夏譜

秋譜

冬譜

九咆唌(池貸成作)

○平調部

前彈 月花集 夏門流水 漳州曲 高山流水

尼姑思還 前彈流水 哈哈調

○唐詩五七絶譜（清傳士然伝）

清平調三排 燉煌楽 思婦楽 楓橋夜泊

陽関曲 静夜思 平蕃曲

下卷

○平調部

清朝新声秘曲八排 関門流水 金線花三排（清沈萍香伝）

銀扭糸三排（同）

○三国志

双碟翠一則

○附録

近世名家詠阮詩録

このように、『観生居月琴詞譜』には一越調や平調の清楽曲のみならず、日本の今様や五言・七言絶句の唐詩を月

江戸文人と清楽（中尾）

五三九

琴音楽に仕立てたものまで収録されており、下巻の巻末には月琴及びその音楽を詠じた詞華集『近世名家詠阮詩録』（以下、『詠阮詩録』と略記）が附録として収められている。

上巻巻頭は、頼山陽、斎藤拙堂、土井聳牙、奥野小山、江馬天江など著名な文人・儒者、及び文雅を以て聞こえた江芸閣、沈萍香など来舶清人による題辞・序・跋・替詩、田能村直入（竹田の養子、初め小虎と号す）による清人月琴弹奏図、詩書画に優れ名医としても聞こえた清客沈草亭による月琴図に、秋琴の自序を冠す。また下巻巻頭には、書家岩谷迂道の代筆による野田笛浦の序が掲げられており、巻末には圭峰の跋文が附されている。さらに附録の『詠阮詩録』には、秋琴と圭峰を含む計三十八名の文人・儒者による五十首の詠阮詩が収められており、その作者名を作品の収録順に列挙すると、次のとおりである。

頼山陽	田能村竹田	亀井昭陽	坂井虎山	辛島塩井
篠崎小竹	斎藤拙堂	斎藤誠軒	広瀬淡窓	広瀬旭荘
梁川星巖	中島棕隱	僧大含	小石檀園	武富圯南
角田九華	矢上快雨	坂井梅屋	僧霞山	河浪桂堂
大熊半医	奥野小山	後藤善	西田津城	竹鼻大岳
蒔田雲処	僧道雅	森山崑陵	山田某	井上繼山
須山素朴	無名氏	丸山精邨	奥山金陵	村井漠所

大塚得一 大島秋琴 隅田圭峰

一見してわかるように、実に錚々たる顔ぶれである。これらの人物の概略については、本稿末所掲の附録を参照されたいが、『詠阮詩録』所収の多くの詩には、それが秋琴のために詠じたものであること、または旧作を再録して秋琴に贈るとの旨が記されており、秋琴がこれらのほとんどの人物と何らかの接点を持っていたことが推測される。その交友の広さには驚かざるを得ない。

頼山陽、田能村竹田、中島棕隱、梁川星巖の詠阮詩については、節を改めて紹介することにし、ここではその他の人物による詠阮詩を数首掲げよう。まず、安芸広島藩の江戸藩邸講学所の教授を勤めていた漢学者、坂井虎山が秋琴に贈った次の詩から見よう。

琴生月琴名字伝 琴生 月琴 名字伝はり

琴横在膝月在天 琴横たはりて膝に在り 月は天に在り

天元不語月亦唾 天は元より語らず 月も亦た唾にして

琴兮能象月団円 琴や 能く月の団円に象る

琴生本是塵表客 琴生 本是れ 塵表の客

対月弹琴月臨席 月に対ひて琴を弾ずれば 月は席に臨む

此時人定四無声 此の時 人定まりて 四もに声無し

江戸文人と清楽（中尾）

五四一

只聞遥籟流空碧 只だ聞く 遥籟ねいろの空碧そらに流るるを

玉篋たまけ聴此恨何窮 玉皇 此れを聴かば 恨み何いづくにか窮きはまらん

故使嫦娥待曲終 故に嫦娥をして曲の終はるを待ちて

促向人間奪其魄 人間じんかんに促うながして其の魄を奪はしめ

舒弹天上広寒宮 舒おもむろに天上の広寒宮に弾ぜしむ

(題月琴為大島子復)

「塵表客」は世俗の外にいる人。「遥籟」は遠くに響く音、ここでは夜空に響く月琴の音を指す。「玉篋」は「玉皇」の誤りであるが、道教における天の最高神である玉皇大帝のこと。「嫦娥」は中国の古代神話に出て来る、仙薬を盗んで月に逃げたとされる仙女。「広寒宮」は月宮である。

静まりかえった夜、月下で奏でる秋琴の月琴の清越な音のみが遠い夜空に響き、その綿々たる音に心を惹かれた天上の玉皇大帝が、嫦娥を人間世界に遣わして秋琴の魂を盗ませ、代りに月宮で月琴を弾かせるという内容であるが、秋琴を世俗の外にいる人と称して、その超俗の気品を称え、遙かなる夜空に流れる月琴の音色が、天上の玉皇大帝の心を動かすほど素晴らしいものであると詠うのである。そして最後は、秋琴の月琴の技がもはや地上の音楽ではなく、嫦娥が月宮で奏でる仙薬のようであると結んでいる。

次に、伊勢の津藩校有造館の学職や郡奉行などを経て、藩校督学となった儒者、斎藤拙堂の詩を見よう。

竭来山水境 山水の境を竭き来たり

偶坐撫孤琴 偶坐して孤琴を撫す

一弾山更秀 一たび弾ずれば 山更に秀ひいで

再彈水更深 再び弾ずれば 水更に深し

山水長如此 山水 長とこしへに此くの如し

峨洋自有音 峨洋 自おのづから音有り

古人不可見 古人 見るべからざるも

猶見古人心 猶ほ古人の心を見る

(「溪山琴興賦以似大島子復」)

先ほど紹介した虎山の詩が、静かな夜に月下で奏でる月琴音楽を詠ったものだとするれば、拙堂のこの詩は、天候に恵まれた日中に山水の美しい野外で月琴音楽に興じる様子を詠じたものである(図二)。詩中の「孤琴」は「月琴」とは明記されていないものの、この詩が『詠阮詩録』に収録されていること、しかも大島秋琴に贈られたことを勘案すれば、月琴を指すのは疑いの余地がない。

「峨洋」は言うまでもなく「高山流水」、伯牙と鐘子期の「知音」の故事を踏まえている(4)。また月琴音楽にも「高山流水」の曲があることから、拙堂は「古人不可見、猶見古人心」と表現しているのである。「古人不可見」は、



図二 平井連山著『月琴楽譜』(利部、大阪群仙堂、明治十年、国立国会図書館蔵)より

杜甫の「八哀詩贈秘書監江夏李公邕」に見える詩句であり、明の思想家である陳白沙の「春日醉中言懷」其二と周囲の「思古」には、それぞれ「古人不可見、空見古人心」「古人不可見、要見古人心」とある。拙堂は唐宋の詩だけでなく、明人の詩をも意識していた可能性が高い。

続けて、浦上春琴に画を学び、頼山陽に詩を教わり、蓮を描くのを最も能くし、土佐の北原泰里の梅、楠瀬大枝の桜と共に三妙と称せられた学僧、霞山の詩を見よう。

山霽黄梅雨　山は霽る　黄梅の雨

楼溟緑樹陰　楼は溟し　緑樹の陰

佳招慚藪玉　佳招に　藪玉慚じ

離席泣蘭金　離席に　蘭金泣く

秦篆舞刀法　秦篆　刀法を舞はし

清音鼓月琴　清音　月琴を鼓す

一人巧多技　一人　巧みにして多技

四海各知音　四海　各おの知音

情話無新旧　情話　新旧無く

世途有古今　世途　古今有り

湖城成暫別 湖城に暫しの別れを成し

輦下約重尋 輦下に重ねて尋ぬるを約す

〔秋琴大島君將遊浪華、端後二日、開留別筵于玉泉樓。友人咸集、余亦与焉賦此為餞〕

この詩には「秋琴大島君、將に浪華に遊ばんとす。端後二日、留別の筵を玉泉樓に開く。友人咸な集ひ、余も亦た焉これくみに与し此れを賦して餞はなむけと為す」との長い題がついており、大坂へ発つ秋琴のために催された送別の宴にて詠まれたものであることがわかる。「端後二日」は旧暦の五月七日。「玉泉樓」は未詳。

「佳招」は良き招き。「藪玉」は「叢玉」、つまり風鈴。風鈴は、唐の岐王が東西南北に玉片を吊し中央に石を吊したものを竹林に下げ、風にぶつかり合って発する音によって物事の吉凶を占ったのがその由来である。このようなことから、最初は「占風鐸」または「風鐸」、「叢玉」「藪玉」などと称された。なお風鈴は、遣唐使によって仏教と共に日本に伝えられた当初から江戸時代にかけて、厄除けとして主に寺の四隅に吊り下げられていたので、霞山はここで「藪玉」の語を用いて僧侶の身である自分を指す。「離席」は送別の宴。「蘭金」は、もともと浮忻国の温泉から出る泥状の金を指すが、これを百回鑄れば色が白く変じ、銀の如く光ることから銀燭を指す。したがって「離席に蘭金泣く」とは、李商隱「無題詩」の「蠟炬成灰淚始乾」（蠟炬 灰と成り 涙始めて乾く）と軌を一にする表現である。「篆」は小篆のこと、「刀法」は篆刻の技法。「湖城」は言うまでもなく琵琶湖のほとりにある近江のことである。

秋琴の篆刻と月琴の両技を褒め称え、秋琴との別れを惜しむ霞山の心情がよく伝わる一首である。

ところで、大坂に移った秋琴は、そこでも多くの文人・儒者と交りを結んだ。次の詩にその一端が窺える。

携月提琴随水波　　月を携へ　　琴を提げて水波に随へば

洋洋已罷又峨峨　　洋洋　　已に罷むとも又た峨峨たり

此興非君誰得識　　此の興　　君に非ざれば　　誰か識るを得ん

舟裏互和今様歌　　舟裏　　互ひに和す　　今様の歌

〔余平日戯弄月琴、小竹先生頗好聽之。一夕相從泛舟澗江、偶不携琴、先生屢罵不雅、遂馳僕齋來彈教曲、因有此作〕

これは秋琴自身による詩であるが、ご覧の通り、「余、平日戯れに月琴を弄す。小竹先生、頗る之れを聴くを好む。一夕相ひ従ひて舟を澗江に泛ぶ。偶たま琴を携へず。先生屢しば雅ならずと罵る。遂に僕を馳せて齋もとむし来たり教曲を弾ず。因りて此の作有り」との長い題が附されている。「小竹先生」とは言うまでもなく篠崎小竹のこと。「澗江」は淀川。

秋琴は日頃より月琴を嗜み、小竹はその演奏を聴くことを甚だ好んだ。そして月が皓々と照る夜、小竹は秋琴を川の舟遊びに誘った。しかし、秋琴がたまたま月琴を携えて来ていないのを見て小竹は落胆し、何度も「雅ならず」と秋琴を罵った。秋琴は慌てて下僕を走らせて月琴を取って来させた。こうして二人は、月下で銀色に輝く川面に舟を浮かべ、揺れる波に身を任せたまま、月琴音楽に興じた。「洋洋」「峨峨」の語は、前述の斎藤拙堂の詩にも見えるように、月琴音楽の「高山流水」の曲を指すと同時に、その次の「此興非君誰得識」の句と合わせて、篠崎小竹こそ

が月琴音楽の最大の理解者であることを示す。そして最後の句を見ればわかるように、二人が船中で興じたのは、月琴の伴奏に合わせた今様の歌であった。

紙幅の関係上、『詠阮詩録』のすべての作品をここに紹介することはできないが、大島秋琴のように生没年も明らかでない人物が、これほど錚々たる文人・儒者から序文や詩を寄せてもらったということは、驚きを以て受けとめざるを得ない。大島秋琴と『観生居月琴詞譜』については、いずれ稿を改めて論じるつもりだが、『詠阮詩録』に収められた詩は、そのほとんどが月琴音楽つまり清楽を賞揚するものであり、秋琴がこれらの詩を集めて自分の月琴楽譜と共に刊行したのは、こうした著名人たちの筆を借りて清楽に箔をつけ、清楽の普及を図ろうとする目論みがあったからであろう。それにしても、これだけ多くの文人・儒者が秋琴の『詠阮詩録』に詩を寄せ、しかもその内容がいずれも清楽を肯定するものであることを勘案すれば、江戸後期の文人たちは概ね清楽を好意的に受け入れ、しかもそのことは後の清楽流行に大きな影響を与えたと考えて間違いないだろう。

## 二、頼山陽と清楽

頼山陽が清楽を聞いた記録が初めて文献に現れるのは、文政八年（一八二五）のことである。この年の四月十五日、山陽は京都の南洞公の宴に招かれるが、その席上で長崎帰りの大島松洲が清客直伝の月琴の技を披露した。その際、

山陽は南洞公の命によって次の詩を詠んでいる。

誰捉蟾華裁玉琴 誰か蟾華を捉りて玉琴に裁たん

団円影裏帯清音 団円 影裏 清音を帯ぶ

四絃如語知何恨 四絃 語るが如きも 知んぬ何の恨みぞ

碧海青天夜夜心 碧海 青天 夜夜の心

(相公席上、大嶋生彈月琴、公命詠之)(5)

「蟾華」は「月華」。「玉琴」は月琴。「四絃」は月琴の四本の絃を指す。月琴を月と結びつけ、李商隱「嫦娥」(6)の詩の末句をそのまま取り入れているところに、山陽の作詩の技量が窺えるが、山陽が大島秋琴の『観生居月琴詞譜』に寄せた題辭は、まさにこの詩の末句の「碧海青天」の四文字を揮毫したものである。

この日の主人役である南洞公とは、文人公卿日野資愛(一七八〇〜一八四六)のことである。本姓は藤原、字は子博、また南洞公。皆川淇園について漢学を修め、漢詩と和歌を善くし、山陽や梁川星巖らと親交があった。彼は後に、京坂に清楽をもたらした龜齡軒斗遠の清楽譜『花月琴譜』のために序文を著すが、それ以前すでに大島松洲による清楽演奏を聴いていたのである。

大島松洲(一七九三〜一八三三)、名は彦集、字は于木、また子成。田邊樂斎、佐藤一斎、桜田虎門などに師事し、長崎を含め四方を遊歴した後、仙台に戻って藩儒となった。王学を唱え、自邸にて心学書院を開いた。

ところで、南洞公の宴からちようど一年後、文政九年の四月に松洲は仙台へ帰るが、山陽はその折りにも松洲のた  
めに詩を作っている。次を見よう。

西湖月 東海月 西湖の月 東海の月

一樣氷輪凝兔魄 一樣の氷輪 兔魄を凝らす

写月為琴過海来 月を写して琴と為し 海を過りて来たる

君伝指法何清越 君の伝ふる指法 何ぞ清越なる

鳳城月 仙台月 鳳城の月 仙台の月

両地相望有円欠 両地 相ひ望めば 円欠有り

月旦若此人可知 月旦 此くのごとくなれば 人知るべし

知音寧無逢与別 知音 寧ぞ逢ふと別れと無からんや

唯有懷裡月常円 唯だ懷の裡に 月の常に円かなるあり

相思彈向天辺月 相思もて 天辺の月に向けて弾ず

東海之東月出処 東海の東 月出づる処

永夜挑摘送月没 永夜 摘挑きて 月の没するを送らん

月影琴声無寢瀛 月影琴声に 寢瀛無し

江戸文人と清楽（中尾）

五四九

況同海内非闊絶 況や海内を同じくし 闊絶するに非ざるをや

(月琴歌、送大島于木帰仙台。于木遊碇、伝琴譜於西客)(7)

詩はいきなり「西湖月」と「東海月」の対句から始まるが、西湖は言わずと知れた中国杭州の湖、東海は日本国の異名。「氷輪」と「兔魄」はいずれも月の別称。中国と日本を対比させ、国は違っても空にかかる月は同じであることを示す。続けて、月琴が中国から海を越えて日本に伝わったこと、松洲の奏でる月琴の音色が甚だ清越であることを記し、今度は「鳳城月」と「仙台月」の対句を用いて、二人の別れを詠う。「月旦」は旧暦の毎月の一日。天上の月にさえ満ち欠けがあるのでから、人間世界のことと言うまでもなからうと詠い、この世に生きている限り、出逢いもあれば別れも避けられないものであることを示す。ただいつまでも欠けることがないのは心の中の思いであり、だからこそ、遠い仙台でも京都で見たと同じ月を眺めながら思いを月琴に託せば、月光や月琴音楽に和漢の国境が無いように、二人の友情も決して途絶えることがない、ましてや二人は、国境を隔てることもなく、同じ日本国内にいるのだから、と結ぶ。

「寰瀛」は境域。俗に音楽に国境はないと言うが、山陽はここで正に中国と日本の国境を越えるものとして、月琴音楽を提示している。少なくとも山陽にとって清楽は、見はてぬ海の彼方に存在する中国へ、思いを馳せる媒体であったと言えよう。

数年後、山陽は龜齡軒斗遠を通して再び月琴音楽に親しむ機会を得るが、その間のことについては、前述の通り、

中野三敏氏の論考に紹介されているので、本稿では割愛することにする。

### 三、田能村竹田と清楽

まず、田能村竹田が文政八年正月二日に森仁里に宛てた書翰の一部を紹介しよう。

月琴御送り被下候。妙に出来候。悴へも少々おしへ被下候よし、何れ是ハ罷出申候而、一曲承り度相楽申候。

圭師の秘曲ヲ承け不申候ハ、かへすがへす残念御座候。(8)

この書翰を見る限り、どうやら竹田は森仁里から月琴を送ってもらったようである。しかも長崎遊学を終えて江戸へ向かう道中に広瀬淡窓の咸宜園へ立ち寄った遠山荷塘(僧一圭)から、月琴の秘曲の伝授を受けなかったことを、竹田は甚だ残念がっている。月琴音楽を修得したいと願う竹田の思いが切実に伝わってくる。

また竹田は、頼山陽が南洞公の宴席にて作った「相公席上、大嶋生彈月琴。公命詠之」(既出)の詩と「九連環詞」を写して「九連環帖」を作り、さらに「情之相通、如環之無端」との題辞を揮毫しているが(9)、「九連環詞」は言うまでもなく清楽曲「九連環」の歌詞、題辞も「九連環」の内容に即したものである(10)。このような一連のことは、竹田の清楽に対する関心の深さを雄弁に物語っている。

その後、文政九年から翌年にかけて竹田は長崎に遊ぶが、その折り、清客たちの船中楽を見物する機会を得る。次

の詩を見よう。

丈余三板舞輕淪

丈余の三板 輕淪に舞ひ

唱起呉歛打鼓頻

呉歛を唱ひ起こし 鼓を打つこと頻りなり

夜半喞呀声不絶

夜半 喞呀 声絶えず

可憐同病惜春人

憐れむべし 同病 春を惜しむの人を

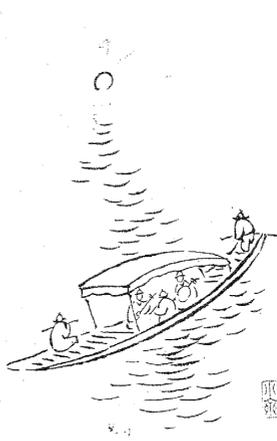
〔自注〕 此日唐山客數十人、賀三板船飲宴鼓樂。

〔春尽日、遊稲佐山作、寄清客朱柳橋〕其五（11）

「三板」は近海域や川で使う小舟。「輕淪」はさざ波。「呉歛」は蘇州の歌または昆曲を指す。竹田は稲佐山の上から、長崎湾にて繰り広げられる清客たちの「春帰」の宴を見物しているが、さざ波に漂う船中で唱われているのは、清客たちの故郷の歌である。それが必ずしも清楽であるとは限らないが、清客たちが太鼓のリズムに合わせて「アイヤ、アイヤ」と囃し言葉を交えながら、深夜まで賑やかに音楽に興じる光景を、竹田は興味深く観察しているのである（図三）。

しかし竹田は、こうした賑やかな音楽よりも、ひっそりと静かに奏でられる清楽を好んだようだ。次を見よう。

秋琴詞契、再び予を留め、其の如是江山楼に宿らしむること累日。晨夕清話し、詩を評し画を品す。詞契、固より吹弾を善くす。月琴を鼓し、洞簫を吹き、幽趣甚だ適へり。風流跌宕として、日びて娯樂し、身の客中に



図三 平井連山著『月琴楽譜』（亨部、大阪群仙堂、明治十年、国立国会図書館蔵）より

在るを知らず、又た塵事の碌碌たるを知らずして、歳の将に除せんとするなり。

〔竹屋煎茶図〕(12)

ここに登場する秋琴は、前述の大島秋琴とは別人で、諸熊秋琴(一八〇〇〜一八六六)という人物である。長崎の人で、波止場役を勤めていた。秋琴は字、詞契は号。竹田は彼とともに詩画を品評し、風雅な文人趣味を満喫しているが、詞契は清楽にも長けており、彼の奏でる月琴・洞簫の音色に、竹田は自分が旅人であることすら忘れ、いつの間にか年を越そうとしているという。竹田にとって清楽は、詩画と同じく羈旅の寂しさを慰めてくれるものであり、俗塵の世界を忘れさせてくれる風流なものとして受け容れられたのである。長崎を訪れた竹田は、清楽の音色に身をひたし、中華の音楽がもたらす風雅で幽玄な趣を享受したのである。

竹田は填詞も得意であったが、前掲の大島秋琴の『詠阮詩録』には竹田の次のような詞が収められている。

長軫円槽項屈　　長き軫　円き槽　項は屈し

四絃九柱音双　　四絃　九柱　音双びたり

何人創出個奇工　　何人なんびとか創出せる個この奇工

匹似嫦娥模様　　嫦娥の模様に匹し似たり

慢撚輕攏調苦　　慢ゆる撚ひ輕攏おさへ　調は苦しく

風清月白当窓　　風清く　月白く　窓に当たる

江戸文人と清楽(中尾)

五五三

冷冷一脈暗泉通 冷冷たる一脈 暗泉に通じ

相和絃声幽咽 相ひ和せし絃声 幽かに咽ぶ

〔詠阮詩録〕〔西江月〕

「軫」は月琴の糸巻、「槽」は胴、「項」は棹の上部の頸にあたる部分、「柱」はフレット。長い糸しめに、丸い胴、曲がった棹頸、四本の絃と九つの柱（13）、しかも四本の絃は二本ずつ同音を出すので「音双」と表現している。まずここまでは、月琴の構造に対する描写である。続けてその形と音について描写しているが、形は月のように真ん丸く、風清月白の夜に窓辺でこれを弾けば、その音は冷冷と深い泉へ通じるかのようにであり、相和する絃の切ない音はまるで咽び泣くかのようにあるという。「暗泉」は地下を流れる泉水のこと。感情豊かな詞の世界に通じていた竹田にとって、月琴の音色は幽玄の境地へと自らを誘うものであったようだ。

#### 四、中島棕隠と清楽

中島棕隠の詩に初めて清楽が登場するのは、文政八年のことである。棕隠はこの年の十二月二十日、前出の大島松洲及び数人の仲間とともに発散会（忘年会）を開いた。

乙酉の臘月廿日、蔽廬にて発散会を作す。嶋松洲・本伯享は月琴を弾じ、彼東碧は胡琴を擲き、元緑斎は和す

るに笛を以てす。蓋し四子、近ごろ長崎より都下に來たる。其の曲は皆な、清客の親ら授くる所より出づ。新奇にして最も賞すべし。余、固より音を解せざるも、漫りに其の一「鳳陽調」なるものを取り、蕪詞を填め、以て歎を抒ぶ。家人ら、絃に倚りて之れを唱ふ。亦た一時の快樂なり。

(中島棕隱『棕隱軒三集』卷下)(14)

これは棕隱「澆散会歌」の序文である。ここには大島松洲の外に、本名はわからないが、本伯享、彼東碧、元緑齋の三人の長崎帰りの文人が集い、月琴・胡弓・笛の三部合奏が行われたことが記されている。さらに棕隱の家人も一緒に歌を歌ったというから、亀井昭陽宅の清楽にも劣らぬ華やかな宴となったことであろう(15)。しかし、亀井家と異なるのは、主である棕隱その人が、通常の漢詩ではなく清楽曲「鳳陽調」の替え歌を作っていることである。次に清楽曲の「鳳陽調」と併せて棕隱の替え歌を掲げよう。

這鳳陽。那鳳陽。鳳陽的原是好地方。朱宗出了朱皇帝。十年到有九年荒。

(平井連山著『月琴楽譜』亨部)(16)

我醉郷

我が酔郷

好酔郷

好き酔郷

酔郷的本是合歡場

酔郷的とは本よりはれ合歡の場

東風未至意先暖

東風 未だ至らずして意先ず暖かなり

寒梅恰送一陣香

寒梅 恰に送る一陣の香

江戸文人と清楽(中尾)

五五五

最初に掲げたのは清楽曲の「鳳陽調」である。棕隱は大島松洲らによって長崎からもたらされたこの歌を聴いて、強い興味を覚えたのであろう。その後に掲げたのが棕隱による「鳳陽調」の替え歌であるが、敢えて中国俗曲の替え歌を創作するところに、棕隱らしさがあると言えよう。なおこの歌は、二十四年後の嘉永二年（一八四九）に、「己酉歳杪津城客舎録旧製月琴詞、以為子復大島仁契」（己酉の歳杪、津城の客舎にて旧製の月琴詞を録し、以て子復大島仁契に為ふ）と題して大島秋琴に贈られ、『詠阮詩録』に収められている。棕隱にとっても自慢の一首であったに違いない。

棕隱の詩集にはこの外にも、清楽に関係した詩が少なからず見受けられる。まず次を見よう。

仲容自喜適豊肥 仲容 自ら喜ぶ 豊肥に適するを

今日風流事自違 今日風流 事自ら違ふ

軽弄相誇挑撥急 軽弄して相ひ誇る 挑撥くことの急なるを

争翻只憾曲詞稀 争ひて翻くも 只だ憾む 曲詞の稀なるを

槽留娟魄盈虧影 槽は留む 娟魄の盈虧の影

柄帶繁星大小微 柄は帯ぶ 繁星 大小の微

典午遺音如可繼 典午の遺音 如し継ぐべくんば

馬蹄鼠尾未全非 馬蹄 鼠尾 未だ全くは非ならず

〔自注〕独立禪師、与僧某書云、「馬蹄、鼠尾、何足言。」蓋嘲清俗。今用其語。

〔『棕隱軒三集』卷下「題清客彈月琴圖」〕

仲容は竹林七賢の一人、字は阮咸。彼は琵琶を善くしたが、体が太っていたので、自分の体形に合わせて、琵琶のふっくらした胴を扁平な形に改良した。これが阮咸という楽器である。なお月琴はこの阮咸から派生したものである。棕隱の詩はこのような背景を踏まえ、おおよそ次のような意味を伝えている。

竹林の七賢の時代に阮咸（月琴）は作られたが、今日の風流な音楽は昔と様変わりしている。軽やかにつま弾き、撥さばきの速さを誇り、争うようにして一曲一曲を披露するが、残念なことに曲目が少なく限りがある。月琴の胴は月光を留め、棹は星々のような大小のフレットを具えている。これが晋の時代の遺音をもし継いでいるのであれば、たとえ清服（馬蹄袖）・辮髪（鼠尾）の清客が弾いていたとしても、だからといって完全に否定する必要もなからう。

この詩の自注に見える独立禪師とは、独立性易（一五九六〜一六七〇）のことである。俗名は戴笠、別号は曼公。清の順治十年（一六五三）長崎に亡命し、翌年来日した黄檗僧隱元禪師の弟子となり、師の布教を助けた。独立性易は明の亡命者であるゆえ、僧某に与えた手紙の中で清服・辮髪の習俗を嘲笑したと見られる。棕隱は清客の絵を見て詩を作るにあたり、独立性易の語を用いたのである。

なお、この詩から知り得ることは三つある。一つは、京都には既に月琴を弾く清客の絵が伝わっていたことである。あるいは大島松洲あたりがもたらしたのであるか。二つめは、「只憾曲詞稀」の一句が示すように、この詩が作ら

れた文政九年当時、京都に伝わった清楽はまだ曲目がそれほど多くなかったことである。おそらく当地では「茉莉花」や「鳳陽調」及び「九連環」を含む代表的な数曲しか聴くことが出来なかったのではあるまいか。三つめは、棕隠が清楽について並々ならぬ関心を持っており、且つその演奏について十分な知識を持っていたことである。

このように才気と好奇心あふれる棕隠のことゆえ、「鳳陽調」の替え歌を作り、月琴を弾く清客の絵を漢詩に詠むだけで満足するはずがない。澆散会の宴からちようど四ヶ月が経った文政九年四月、仙台へ帰る大島松洲のために、棕隠は次の送別詩を作っている。

嘗攬蟾華自玉京　嘗て蟾華（月琴）を攬るは玉京（月都）よりす

霓裳而後有新声　霓裳より後に新声あり

人間難示真面目　人間（じんかん）示し難し　真面目

狂籍風流顧曲名　狂（むな）しく籍（か）る　風流　顧曲の名

才子声詩伝清越　才子の声詩　清越を伝ふ

睽離縦遠情何歇　睽離（たひ）縦（た）ひ遠きも　情何ぞ歇（や）まん

各天従今抱此琴　各天　今より此の琴を抱き

切于屋梁看落月　切（ひそ）かに屋梁に落月を看ん

〔自注〕松洲善月琴。余曩学其弹法。

自注に、「松洲、月琴を善くす。余、曩さきころ其の弾法を学ぶ」とあることからわかるように、棕隠は前回の宴から数ヶ月のうちに、松洲から月琴を学んだのである。「霓裳」は唐の玄宗が夢に月宮殿で天人の舞樂を見、これにかたどって作ったという「霓裳羽衣曲」。「顧曲」は周瑜、彼が若い頃より楽律に詳しく、演奏に誤りがあれば必ず振り向いたことからこのように称したが、後には音樂に精通している人の代名詞となった。ここでは言うまでもなく大島松洲を指す。「声詩」は音樂。「睽離」はそむき離れること。

棕隠が習得した曲とその腕前がどれほどのものであったかは知るすべがないが、松洲が立ち去った後も、清樂を愛好する棕隠の気持ちに変わりはなかった。次を見よう。

好一朶花情味淡　好うつくしき一朶の花　情味淡し

粲然相对当知音　粲然として相ひ対すれば　知音に当たる

撫存風露何煩絮　風露を撫存すれば　何ぞ絮さまたするを煩さわげんや

低按清詞擲月琴　低く清詞を按じて月琴を擲つまびく

〔自注〕清俗所用月琴、有茉莉花曲。其第一詞云、「好一朶茉莉花」

〔『棕隠軒四集』卷下「咏茉莉花」十六首・其十二〕

松洲が仙台に帰ってから二年が経つ文政十一年に、棕隠は「咏茉莉花」詩十六首を作っているが、その第十二首に

斯くの如く、清楽曲「茉莉花」の首句を詠み込んでいる。なお自注に「清俗の用ふる所の月琴に、茉莉花の曲有り。其の第一詞に『好<sup>うつく</sup>しき一朵の茉莉花』と云う」と記している。可憐な茉莉花<sup>ジャスミン</sup>を知音に見立てて共に語らんとし、清楽曲「茉莉花」の歌詞を思い浮べながら月琴を弾く棕櫚の酒脱な風流心と、清楽に対する深い思いがよく伝わる一首である。

## 五、梁川星巖と清楽

梁川星巖は文政七年に妻紅蘭を携えて長崎へ下り、そこで長篇の七言古詩「月琴篇」を創作している。前掲徳田氏の論文にその大部分が引用されているので、本稿では重複を避けるが、この詩において星巖は、月琴が姦淫を媒介する具であり風教に有害なものであると、痛烈に批判している。

しかし星巖の詩には、清楽に關係する詩句が案外多く、これらを見る限り、星巖は決して清楽を毛嫌いしたわけではなさそうである。例えば次の詩を見よう。

声同霖雨繁　　声は霖雨の繁きに同じく

形似望舒円　　形は望舒<sup>もちづき</sup>の円<sup>まじ</sup>かなるに似たり

春風無限意　　春風　無限の意あり

穠李手中弾 穠李 手中に弾ず

(『詠阮詩録』所収「詠月琴」)

これは『詠阮詩録』に星巖の作品として収録されたものである。作られた状況がまったくわからないため何とも言えないが、この詩における「穠李」は後掲の詩におけるそれと同じく、月琴を奏でる美女を指す。もし星巖がまったくの月琴嫌いだったとしたら、このような詩を作るであろうか。また次の詩を見よう。

鬪曲荷蘭館下行 曲を鬪はしつゝ荷蘭館下を行けば

呉歛楚艷各新声 呉歛 楚艷 各おの新声あり

夜深曲尽画船散 夜深く 曲尽きて 画船散ず

三十六湾空月明 三十六湾 空しく月明

〔自注〕梁元帝『纂要』、呉歌曰歛、楚歌曰艷。

(梁川星巖『星巖乙集』卷三『西征集』三『瓊浦雜詠』其十二)

これは「月琴篇」と同じく文政七年に長崎で詠まれた詩であるが、「楚艷」は自注にもあるように「楚の歌」。つまりここでは「呉歛」と「楚艷」を合わせて中国の歌、清楽を指す。

続けて、文政九年に南洞公日野資愛に和して作った次の詩を見よう。

風前脈脈立無言 風前 脈脈 立ちて無言

江戸文人と清楽(中尾)

五六一

云是劉家侍妾魂

云へらく 是れ劉家侍妾の魂と

但使上他阿咸譜

ただ他の阿咸の譜に上らしむれば

分明怨恨曲中論

分明に曲中の論を怨恨まん

〔自注〕杜甫。南漢王劉銀侍妾、名素馨、其冢上花特香、因得名。近日都人多彈阮咸。其詞中有茉莉、而無素

馨。

〔星巖戊集〕卷二「京甸集」「奉和南洞公詠素馨花二十絶句。每詩尾聯、以唐句。蓋倣宋子虛鯨背吟之体」其五

「素馨花」は、五代の南漢王劉銀の侍女素馨に因む花であり(17)、茉莉花と同じく強い香りを帯びる。「宋子虚鯨背吟之体」とは、元の宋無(朱晞顔)の『鯨背吟集』自序(18)にあるように、各首の結句に古人の詩句をそのまま用いる連作詩のスタイルであるが、星巖はこれを模倣し、杜甫「詠懷古跡」第三首の「分明怨恨曲中論」を用いている。「阿咸」は阮咸、つまり月琴。星巖の自注に見えるように、近ごろ京都には月琴をつま弾く者が多く、その歌に「茉莉花」という曲があるという。

また天保十一年(二八四〇)一月二十日に星巖は、木村松坪に誘われた新春の梅見の宴にて、月琴の名手として名を馳せた平井連山姉妹の清楽演奏を聴き、次の詩を詠んでいる。

縞衣掩映画裙紅

縞衣は画裙の紅に掩映し

春在氤氳香霧中

春は氤氳たる香霧の中に在り

怪得花枝乍低面　怪しみ得んや　花枝の乍ち面を低れ

避他穠李四絃風　他の穠李の四絃の風を避くるを

〔自注〕時連山仙姑二女子来摘月琴

〔星巖戊集〕卷一『玉池生後集』其二所収「正月念日同松坪木村君遊東郊梅園」二首・其一

月琴をつま弾く連山姉妹の美しさに、花も羞じらい面を伏せるほどであるという。連山姉妹の容姿と月琴の腕前を賞賛する詩ではあるが、「月琴篇」で示したような清楽への痛烈な批判の面影は、片鱗すら見られないのである。

## 終わりに

以上、江戸文人と清楽の関わりについて考察した。遠山荷塘、亀齡軒斗遠、大島秋琴、大島松洲など長崎帰りの文人騒客によって、長崎の清楽は、江戸、京坂をはじめ全国各地へと広がり、それぞれの土地の文人・儒者の耳にまで届いた。その結果、多くの文人・儒者が清楽に対して強い興味と関心を抱き、その異国情緒あふれる風情を楽しむとともに、宴を催しては興を覚え、これを漢詩に詠んだ。中には田能村竹田のように清楽の歌詞を墨帖に仕立てあげる者もいれば、中島棕隠のように清楽曲の替え歌を創作し、しかも自ら月琴の奏法を習得する者もいた。その背景には、未だ見ぬ中国の風土に対する強い好奇心と、風雅を好み雅俗を共に愛好する江戸文人の成熟した文学観及び価値観が

あった。

しかし江戸文人と清楽の関わりは長い間、見過されてきた。本稿はその一端を取り上げたに過ぎないが、今後ますます活発な研究が行なわれることが期待される。

五六四

人名(生没年)	概略
頼山陽 (一七八一～一八三二)	江戸後期の儒者、名は襄、字は子成、通称は久太郎、別号に三十六峰外史。大阪出身。江戸で尾藤二洲らに学び、父春水について安芸広島に移るが、二十一歳で出奔、脱藩の罪で自宅幽閉となる。赦免の後、京都で開塾。詩・書に才能を発揮。幽閉中に起稿した『日本外史』は、幕末の尊皇攘夷派に強い影響を与えた。著作は他に『日本楽府』等。
齋藤拙堂 (一七七九～一八六五)	江戸後期の儒者、本姓は増村、名は正謙、字は有終、別号に鉄研。江戸出身。昌平黌学問所で古賀精里に学び、文政三年、伊勢津藩校有造館の学職となり、郡奉行などを経て、弘化元年に藩校督学に進む。種痘館の設置にも努めた。著作に『拙堂文話』『海外異伝』『救荒事宜』等。
土井整牙 (一八一八～一八八〇)	江戸後期～明治初期の儒者、名は有格、字は士恭、通称は幾之助。伊勢津藩儒医土井橘窓の次男。石川竹厓・齋藤拙堂に学び、藩校有造館の助教・講官を務め、佐幕を主張。
奥野小山 (一八〇〇～一八五八)	江戸後期の儒者、名は純、字は温夫、通称は弥太郎、別号に寸碧楼。大阪出身。篠崎小竹に学び、天保の頃、和泉伯太藩に招かれる。後に近江三上藩に仕え、大阪蔵屋敷留守居役を務め、藩士の子弟に教えた。著作に『小山堂文鈔』『小山堂詩鈔』等。

<p>江馬天江 (一八二五～一九〇一)</p>	<p>幕末～明治初期の医師・儒者、本姓は下坂、名は聖欽、字は永弼、通称は俊吉。近江出身。淡海槐堂の弟、江馬榴園の養子。緒方洪庵らに師事し、詩文を梁川星巖に学ぶ。明治二年太政官吏官を辞職し、京都で私塾を開いた。著作に『賞心贅録』等。</p>
<p>野田笛浦 (一七九九～一八五九)</p>	<p>江戸後期の儒者、名は逸、字は子明、通称は希一、別号に海紅園。江戸で古賀精里、古賀侗庵に学び、丹後田辺藩士を務める。文政九年に漂着した唐船の清人と筆談し、『得泰船筆語』を著して有名になる。安政四年に家老となり、藩政改革に尽力した。著作に『海紅園小稿』等。</p>
<p>田能村直入 (一八一四～一九〇七)</p>	<p>江戸後期～明治初期の南画家、本姓は三宮、名は痴、字は顧絶、始め小虎と号し、後に直入と改む。画を田能村竹田に学び、業を角田九華の門に受け、詩を広瀬旭莊に学ぶ。後、大坂に出て経史を篠崎小竹・大塩中斎に、書を雪堂和尚に、禅を天柱禪師に受く。壮年より遊歴を好み、小虎時代の画は専ら明清画を写して細密精妙の風を描き、中年以後は自ら一家の典型を成した。竹田没後、その養子を名乗る。作品は『名花十二客』などが有名、著書に『汲古山泉』『青灣茶会図録』等。</p>
<p>沈草亭 (?～?)</p>	<p>来舶清人、名は璠、字は魚石。蘇州出身。詩書画に長け、『元明清書画人名録』に名前が見える。長崎淹留中、福濟寺住持唐僧大鵬和尚の難病を治癒し、名医としても聞こえた。書は楷行草いずれにも妙を得ており、『長崎名勝図説』に数首の詩が収められている。</p>
<p>江芸閣 (?～?)</p>	<p>来舶清人、名は大楯、字は辛夷、別号に印定。蘇州出身。画人江稼圃の弟。化政期から天保年間にかけて十回以上来航しており、詩書画に秀で、音楽にも長けていた。江戸後期に来舶した清人の中で最も文名の高かった一人であり、長崎遊学の多くの文人墨客と交わりを結んだ。</p>
<p>沈萍香 (?～?)</p>	<p>来舶清人、名は鳳翔。蘇州出身。化政期から天保年間にかけて十回以上来航しており、詩書を善くし、音楽に長じた。江芸閣ほど文名が高くなかったものの、やはり多くの文人墨客と交流し、特に頼山陽と親交があった。</p>

田能村竹田 (一七七七～一八三五)	江戸後期の漢詩人、名は孝憲、字は君彝。豊後岡藩医の次男。藩校由学館の頭取となる。藩内の農民一揆の際、藩政改革の建言が容れられず隠退。絵を谷文晁らに学び、繊細な筆致の独自の画風を確立。幕末文人画壇の代表的作家。頼山陽らと親交を持ち、詩詞、書にも優れた。作品に『亦復一楽帖』、画論に『山中人饒舌』がある。
亀井昭陽 (一七七三～一八三六)	江戸後期の儒者、名は昱、字は元鳳、別号に空石、月窟。亀井南冥の長男。寛永四年家督を継ぎ、筑前福岡藩儒となるが、十年に免官。徂徠学を基本に朱子学を取りいれて家学を大成。博学で知られた。著作に『論語語由述志』等。
坂井虎山 (一七九八～一八五〇)	江戸後期の儒者、名は華、字は公実、別号に臥虎。安芸広島藩儒坂井東派の子。父や頼春水に学び、文政八年に藩学問所教授となる。天保八年から江戸藩邸講学所教授となり、帰郷後は家塾百千堂を開いた。著作に『杞憂策』『論語講義』等。
辛島塩井 (一七五五～一八三九)	江戸中期～後期の儒者、名は知雄、字は伯彝。家は代々肥後熊本藩儒。草野潛溪に学び、天明六年藩校時習館訓導。寛政四年江戸に出て藩主の侍講を務める。享和二年、幕命により昌平黌で講義を行なう。文政四年時習館教授。著作に『学政或問』『読周官経説』等。
篠崎小竹 (一七八一～一八五一)	江戸後期の儒者、本姓は加藤、名は弼、字は承弼、別号に畏堂、南豊。大坂の人。篠崎三島に学び、その養子となる。江戸で尾藤二洲、古賀精里に学び、帰坂後、家塾梅花書屋を継ぐ。詩文書にすぐれ、頼山陽らと交わり、蔵書家としても知られた。著作に『小竹斎文稿』等。
斎藤誠軒 (一八二六～一八七六)	江戸後期の儒者、斎藤拙堂の長男、名は正格、字は致卿。父に学び、後に京都・摂津などに遊学。伊勢津藩に仕え、藩校有造館の督学に進む。著作に『誠軒集』等。
広瀬淡窓 (一七八二～一八六五)	江戸後期の儒者、名は建、字は子基、別号に峇陽。広瀬旭荘の兄。亀井南冥・昭陽父子に学ぶ。郷里の豊後日田に私塾咸宜園を開き、独自の教育法で多数の人材を育てた。門人に大村益次郎、高野長英

<p>広瀬旭荘 (一八〇七〜一八六三)</p>	<p>らがいる。漢詩人としても著名。著作に『約言』『遠思楼詩鈔』等。</p> <p>江戸後期の儒者、名は謙、字は吉甫、別号に梅墩。豊後日田出身。広瀬淡窓の弟。亀井昭陽、菅茶山らに学ぶ。兄の私塾咸宜園を運営した後、各地を歴遊。文久元年に帰郷して雪来館を創立するが、翌年撰津池田に移住する。漢詩人としても著名。著作に『梅墩詩鈔』『追思録』等。</p>
<p>梁川星巖 (一七八〇〜一八五八)</p>	<p>江戸後期の漢詩人、名は卯、孟緯、字は白兔、公図、別号に詩禪。美濃出身。山本北山に学ぶ。妻の紅蘭と諸国を遊歴し、江戸神田に玉池吟社を開く。後に京都で梅田雲浜らと尊王攘夷運動に加わるが、安政の大獄直前に死去。詩集に『西征詩』等。『星巖先生遺稿』がある。</p>
<p>中島棕隱 (一七七九〜一八五五)</p>	<p>江戸後期の儒者、漢詩人、名は徳規、規、字は景寛、士成、別号に棕軒、因果居士、安穴先生。京都の人。伴蒿蹊に国学を、村瀬栲亭に儒学を学ぶ。一生仕官せず、好事儒者と自称。和歌、書、狂詩、戯作にも優れた。詩集に『棕隱軒五集』『鴨東四時雜詞』『金帯集』等。</p>
<p>僧大含 (一七七三〜一八五〇)</p>	<p>江戸後期の僧、号は鴻雲、雲華。真宗大谷派。豊後満徳寺に生まれ、豊前古城の正行寺の鳳嶺の養子となり、住持をつぐ。東本願寺高倉学寮で学び、天保五年に講師を務める。詩文、書画を善くし、頼山陽、田能村竹田らと交わった。著作に『安楽集聴記』『雲華集』等。</p>
<p>小石元端 (一七八四〜一八四九)</p>	<p>江戸後期の医師、名は竜、別号に拙翁、櫻園。京都出身。小石元俊の子。江戸で大槻玄沢、杉田玄白らに学ぶ。父の私塾究理堂を継ぎ、新宮涼庭らと共に京都の二大蘭方医といわれ、頼山陽、田能村竹田らとも交遊した。著作に『東西医説析義』『薬性摘要』等。</p>
<p>武富圀南 (一八〇八〜一八七五)</p>	<p>江戸後期の漢学者、佐賀藩儒、名は定保、字は元謨、別号に密庵、碧梧楼、歛翁。肥前佐賀藩儒武富廉斎七世の孫。家学を受けるとともに、中村嘉田に従学。後、江戸で古賀精里に学び、弘化四年に藩校弘道館の教官となる。家はもと豪商で中国の書画を数多く所蔵し、自身も和漢の学のほか、書画・音楽を善くした。著作に『密庵詩文集』『密庵文類略抄』等。</p>

角田九華 (一七八四～一八五六)	江戸後期の儒者、本姓は仲島、名は簡、字は大可、廉夫。角田東水の養子。豊後岡藩士。脇蘭室や大阪の中井竹山に学ぶ。藩に戻り、藩校由学館の侍講を経て教授となる。著作に『近世叢語』『近世鏡人録』等。
矢上快雨 (?～?)	江戸後期の漢学者、名は行、字は子生。阿波出身。京都三条高倉西に住す。豊後日田の広瀬淡窓の咸宜園に学んだ。編著に『宜園五律集』『宜園百家詩』等。
坂井梅屋 (一七七四～一八四七)	江戸後期の人、加賀大聖寺藩士、名は茂喬、字は子木。寛政八年に家督を嗣ぎ、天保十一年に学問所会頭示談相手を命ぜられる。学に通じ、特に詩を善くした。
僧霞山 (一七八八～一八七二)	江戸後期の僧、俗姓は市原、字は遠恕、法名は日生。土佐出身。土佐の日蓮宗宝蔵寺の住職。後に近江の常昌寺に移る。京都で浦上春琴に画を、頼山陽に詩文を学んだ。晩年、美濃安楽寺に入る。
大熊半医 (一八〇六～?)	安政頃の医者・漢学者、名は寅、字は子亮、伯虎、別号に克斎、亀隱、秦川、夢墨、膽庵。備中の人。大阪に住み、眼科医の傍ら儒学も教えた。菅茶山、猪飼敬所に詩文を学んだ。著作に『亀陰詩鈔』等。
西田津城 (?～?)	『東瀛詩選』巻四十四に詩二首が収められている。端書きに拠れば、名は尚素、字は子元。大阪の人。
蒔田雲処 (一八二二～一八六五)	江戸時代後期の画家・書家、名は亮、字は公弼。蒔田雁門の子。越前坂井郡高柳村の代官。後に京都・江戸を遊歴して、書画を業とする。墨竹画を得意とした。
奥山金陵 (一七九五～一八六七)	江戸時代後期の医師、名は家憲、字は叔章、別号に桃蔭、閑窩。伊勢出身。医師を竹中文輔・華岡青洲に、儒学を松本愚山に、詩文を広瀬旭荘に学ぶ。尊王攘夷派の藤本鉄石と親交があり、その天誅組挙兵を助けた。
村井遠所 (?～?)	『東瀛詩選』巻四十三に詩二首が収められている。その端書きに拠れば、名は常之、字は士教、別号に竹弄。伊勢山田の人。

隅田圭峰

幕末の伊勢津市の豪商、名は立、屋号は隅田屋。文事を好み、詩書画および月琴に長じた。

(?????)

※市古貞次等編『国書人名辞典』(岩波書店、一九九三～一九九八年)、石川洋『江戸文人辞典』(東京堂出版、一九九六年)、上田正昭等監修『日本人名大辞典』(講談社、二〇〇一年)、清・俞樾撰『東瀛詩選』(光緒九年刊、斯道文庫所蔵の版本を汲古書院が一九八一年に影印出版)などに基づく。本表に未収録の人物は、その事跡が未詳。

## 注

- (1) 徳田武『江戸漢学の世界』(ベリかん社、一九九〇年)所収。初出は『明治大学教養論集』第二二三号『日本文学』(一九八九年三月)所収「遠山荷塘と亀井昭陽」及び『明治大学教養論集』第二三三二号『日本文学』(一九九〇年三月)所収「遠山荷塘と広瀬淡窓」
- (2) 中野三敏『江戸狂者伝』(中央公論新社、二〇〇七年)所収。初出は『奥村三雄教授退官記念 国語学論集』(桜楓社、一九八九年)所収「亀齡軒斗遠の前半生―天保の風流―」及び『文学研究』(九州大学文学部、一九九〇年)所収「亀齡軒斗遠の後半生―天保の風流―」
- (3) 関西大学附属図書館及び東京都立図書館中山文庫等に所蔵。波多野太郎『月琴音楽史略暨家蔵曲譜提要』(『横浜市立大学紀要人文科学』第七篇、『中国文学』第七号、横浜国立大学、一九七六年十月)に私蔵版の影印収録。
- (4) 「伯牙善鼓琴、鍾子期善聽。伯牙鼓琴、志在高山、鍾子期曰、善哉、峨峨兮若泰山。志在流水、鍾子期曰、善哉、洋洋兮若江河」(『列子』湯問)
- (5) 木崎愛吉・頼成一共編『頼山陽全書』詩集卷十八(頼山陽先生遺蹟顕彰会、一九三二年)、五〇一頁。
- (6) 「雪母屏風燭影深、長河漸落曉星沈、嫦娥心悔偷靈藥、碧海青天夜夜心」(李商隱の「嫦娥」)

- (7) 『頼山陽全書』詩集卷十九、五四〇～五四一頁。
- (8) 『田能村竹田全書』(書翰集)、一三七～一三九頁。
- (9) 『田能村竹田全書』(文全集・遺著)、八三頁。
- (10) 『田能村竹田全書』(詩詞集)、一五三頁。
- (11) 『田能村竹田全書』(詩詞集)、一八一～一八二頁。
- (12) 「秋琴詞契、再留予、宿其如是江山樓者累日。晨夕清話、評詩品畫。詞契固善吹彈。鼓月琴、吹洞簫、幽趣甚適。風流跌宕、日以娛樂、不知身之在客中、又不知塵事碌碌、歲之將除也」(『田能村竹田全書』文全集・遺著、八三頁)
- (13) 本来、清樂に用いられる月琴は八柱であるが、糸巻から出た絃が最初に触れるところである「山口」(ナット)も合わせて、古くは「九柱」といった。
- (14) 「乙酉臘月廿日蔽廬作澆散會。嶋松洲・本伯享彈月琴、彼東碧搗胡琴、一元緑斎和以笛。蓋四子近自長崎來都下。其曲皆出于清客之所親授。新奇最可賞。余固不解音、漫取其一鳳陽調者、填蕪詞、以抒歡。家人等倚絃唱之、亦一時之快樂也」(『詩集 日本漢詩』第十二卷所収) 以下、棕隱詩の本文はすべて同書に基づく。
- (15) 拙稿「亀井昭陽を魅了した清樂」(『南腔北調論集』、山田敬三先生古稀記念論集刊行会、二〇〇七年)を参照されたい。
- (16) 大阪群仙堂、明治十年、国立国会図書館蔵。
- (17) 『淵鑑類函』卷四百六、花部二・素馨二に「亀山志」曰、昔劉鋹有侍女、名素馨。冢上生此花、因以得名」とある。
- (18) 清・顧嗣立『元詩選』初集卷三十六所収。『鯨背吟集』自序の原文は以下のとおり。「今將所歷海洋・山島、与夫風物所聞、舟航所見、各成詩一首、尾聯以古句。」